

キラリ TOKYO

一輝く企業の現場から一

第142回

株式会社松崎人形



明るくて開放的な工房には、四代目・松崎篤氏を含め若手社員の姿も多い。技術の継承と、若手の斬新な発想力を伸ばすことが、松崎人形にとって重要な課題だ

「原型」づくりの能力が最大の強み

松崎人形は、ひな人形や五月人形などを手がける足立区の工房。創業は1920年で、100年近い歴史を誇る老舗だ。

節句人形は、型に桐塑(とうそ。桐の粉末に生麩糊を混ぜてつくった粘土)を詰め込んでつくった胴体に溝を彫り、そこに布生地を差し込む(木目込む)ことでつくられる「江戸木目込人形」と、ワラなどでつくられた胴体に衣装を着せた「江戸衣裳着人形」とに大別される。松崎人形は両方を手がけており、これは業界でもかなり珍しい。

人形づくりの世界では分業制が敷かれ、頭(かしら)と胴は別々の工房でつくられるのが普通。しかし、松崎人形は両方を手がけており、トータルデザインされた人形づくりが特徴だ。

三代目である社長の松崎光正(幸一光・こういっこう)氏は、美術大学で彫刻を専攻。大学在学中に二代目だった父が急逝したことで、松崎人形を継ぐことになった。

「人形の印象を左右するのは、やはり顔。人形の表情は最後に顔を描き込む作家によって異なります。そのため、人形づくりで最も難しいのが頭をつくることです。たとえば江戸木目込人形

の場合、木彫りなどでつくった原型から型取りし、素焼き、石膏などで量産するのですが、多くの工房は他社から購入した頭に表情を描いて人形をつくるため、どうしても差別化がしづらいですね。一方、当社のように原型づくりから手がける工房なら、個性豊かな頭を生み出せます。人形師で頭の原型をつくる職人は私を含めて日本に数人しかいませんので、そこが当社にとって一番の強みかもしれません」(松崎氏)

情報感度を高め、新分野にも積極的に挑戦

高度成長期までは飛ぶように売れていた日本人形だったが、1980年代に入ると停滞の兆しが見え始めた。そこで松崎氏は、売れる商品を生み出すためさまざまな努力を重ねてきた。「たとえば1983年から作り始めた金太郎人形では、新機軸を数多く取り入れました。職人にとって裸の人形は難しい素材で、それまで当社では手がけたことがなかったのですが、ニーズがあると見込んで、あえて挑戦しましたね。ただし、昼間は通常業務があるため、新製品の開発に取組む余裕はありません。そこで、夜の工房に一人で残ってコツコツ試作を重ねました。この習慣は、今も続いています。新しいものを自由につくるのは楽し

伝統に**新発想・新技術**をプラス

[会社概要]

代表：代表取締役 松崎 光正 (松崎 幸一光) 氏

業種：日本人形開発・製造業

資本金：1000万円

従業員：16名 (2018年6月現在)

所在地：東京都足立区栗原2-4-6

TEL：03-3884-3884 FAX：03-3884-3886

URL：<http://www.koikko.com/>



技術を伝える場が必要

若い人の中には、職人になりたいと考える人がたくさんいます。行政などと連携し、そういう方々に技術を伝える学校があればいいですね。



頭・胸から衣装まですべて手がけているため、美しいトータルデザインが実現できる



木目込人形の「ことわざむらい」シリーズ。現代の暮らしに合う小さなサイズが好評だ



展示会ではさまざまな工夫を盛り込んだ新製品を出展して、人気を博している

くて、まったく苦にはなりません」(松崎氏)

現在、最大のターゲットはひな人形や五月人形の市場。しかし、新分野の開拓も必要だと松崎氏は考えている。

「ニーズに応じ、節句人形以外の人形を生み出すことも考えています。また場合によっては、当社の技術を活かして人形以外のものをつくることだってあり得るでしょう。そのためには、常にアンテナを張ってさまざまな情報を得ること。そして、新たな商品を生み出すための柔軟性を維持続けることを、普段から心がけています」(松崎氏)

次代に**技術継承する仕組みを整えたい**

今も第一線で活躍する松崎氏だが、年齢は60代半ば。息子の篤氏など、次代への引継ぎは常に意識している。

「若い人々の感覚はやはり新鮮。先日も、若い女性スタッフたちに製品づくりについて意見を聞いたのですが、僕には思いつかないような提案がいくつも出たのです。この優秀な発想力を活かさない手はないと、改めて感じました」(松崎氏)

「いずれは父も引退しますが、今の時点ではまだ私が父に取って代われるとは思いません。そこで、経営・営業・技術などの分

野で自分にできることは何かを模索し、徐々に私の領分を増やさなければと考えています」(四代目・松崎篤氏)

東京都雛人形工業協同組合の理事長でもある松崎氏は、業界全体を盛り上げる取組みにも注力したいと目を輝かせている。「市場が地盤沈下して各社の売上げが縮小すると、せっかくの技術も途絶えてしまいます。幸い、業界には若手も多い。彼らが食べていける仕組みを整えることが、我々年配者の仕事だと思うのです。たとえば、技術を教える学校を設立できれば、後継者育成にも業界活性化にも役立つでしょう。

この業界では、多くの人が協力してものづくりをしています。自社が栄えることばかりを考えてはダメ。業界全体を盛り上げる努力が必要だと思うのです」(松崎氏)

取材後記

東京手仕事プロジェクトで開発された「ことわざむらい」をはじめとした松崎社長の商品開発は「日常生活で自然に使われる製品」を目指し、伝統技術を守りつつ、その技術を活かして、伝統工芸業界を盛り上げていきたいという心意気を感じました。前向きに開発に取り組むその姿勢は、これからも新たな商品を私たちに見せてくださると思います。(城東支社 堀内優香)